

吸収域、小脳に関心領域を設定し、同部位の局所脳血流を比較した。低吸収域の血流は4.7~16 ml/100 g/minの範囲を示し、皮質血流に相関しなかった。これに対し小脳を55 ml/100 g/minに固定して補正を行った場合、低吸収域の血流値の範囲は同様であったが、皮質血流に比例する傾向を示し、血流の過大評価や過小評価を生じているためと考えられた。

5. 高血圧性脳出血定位脳手術前後における脳血流SPECTの評価

中根 香織	竹下 元	外山 宏
伊藤 清信	鶴銅起久子	富田 和美
古賀 佑彦	(藤田学園保衛大・医・放)	
片田 和廣	竹内 昭	(同・衛・診放技)
野々村和彦	神野 哲夫	(同・脳外)
榎原 英二	横山貴美子	(同・放部)

高血圧性脳出血に対する定位脳手術を脳血流SPECTにより評価した。対象は視床出血10例、被殻出血5例で、大多数が軽度意識障害と完全片麻痺を呈していた。脳血流SPECTは、^{99m}Tc-HMPAOを用い、発症時、術直後、10日以内および1か月前後の4回撮像した。血腫の大きさ、減少率、錐体路の破壊の有無はCTにて評価し、SPECT上の半球および深部構造の左右差とCT・臨床所見とを対比した。軽症例が多くたため、占拠効果の脳血流に及ぼす影響は深部構造のみ評価可能であり、意識や麻痺の改善は脳血流左右差には明確には反映されなかつた。錐体路の破壊の有無、血腫の減少率には関係なく、慢性期には血流の半球左右差が生じる傾向にあつた。

6. ^{99m}Tc-Teboroximeの心筋からのクリアランス解析

中嶋 憲一	滝 淳一	分校 久志
秀毛 範至	李 亜明	谷口 充
久慈 一英	利波 紀久	久田 欣一
(金沢大・核)		

Teboroximeの心筋からのクリアランスの意義について関心がもたれている。そこで同一の体軸断層面に冠動脈造影上有意の狭窄($\geq 75\%$)と狭窄のない対照領域が認められる症例を選び解析を行った。また、クリアランス解析に影響する因子を検討した。その結果、本剤のク

リアランスは2指指数関数近似でよく近似されるが、比較的短時間の収集では単指指数関数近似が実際的であること、収集開始時間が測定に大きく影響することが判った。また、臨床的検討では、同一症例では冠動脈の狭窄部位で対照部と比較して有意のクリアランスの遅延が認められたが、集積の初期値とクリアランスの間には有意の相関が認められた。

7. 冠動脈疾患における²⁰¹Tl心筋SPECTと^{99m}Tc-teboroxime心筋SPECTの比較検討

大島 統男	村元 秀行
	(名古屋第一赤病院・放)
大野 三良	(同・循)
茜部 寛	伊藤 健吾 佐久間貞行
	(名古屋大・放)

心臓カテーテル検査を施行した19人の患者につき^{99m}Tc-teboroxime(TEBO)心筋SPECT(運動負荷と安静)と²⁰¹Tl心筋SPECT(運動負荷と安静)を施行し比較した。TEBO SPECTは静注後2分以内に各8秒、32ステップ、180°収集で施行した。SPECT像は9個のセグメントに分け定性的に評価した。

TEBO心筋SPECTと²⁰¹Tl心筋SPECTの一一致率は147/171(86%)(p=NS)であった。冠動脈有意狭窄を75%以上または50%以上とすると両者の一致率は各89%と88%であった。TEBOおよび²⁰¹TlはLADでは9/13(p=NS), LCxで3/8(p=NS), RCAで9/12(p=NS)と検出できた。TEBOは3セグメント(2例)にて、肝集積のため下壁の評価が困難であった。短時間収集によるTEBO心筋SPECTは冠動脈病変の検出に有用と思われる。

8. ²⁰¹Tl, ¹²³I-BMIPP, ¹⁸F-FDGを用いた心筋血流、脂肪酸代謝、糖代謝の検討

田所 匡典	伊藤 健吾	山下 雅人
加藤 隆司	石垣 武男	佐久間貞行
		(名古屋大・放)
西浦 卓也	奥村 健二	伊藤 隆之
		(同・二内)

心筋梗塞6例、狭心症2例を対象に5時間以上の絶食下で²⁰¹Tl, ¹²³I-BMIPPによるSPECTと¹⁸F-FDG PETを行った。横断像にて約1.5×1.5 cmのROIを各